高尾山報 令和2年10月号 毎月1回発行 通巻第681号

高尾山報

令和2年10月号

懸佛総供養の日

天高し

法の水茎 (100)

大正大学講師　髙橋秀城

陰暦十月は神無月と呼ばれます。これは、十月に日本全国の神々が出雲大社に集結して、その他の諸国の神が不在になるという説に由来するとか。神様が留守となり仏様だけ残ることから、陰暦十月を「仏月」とする洒落た呼び名も残されています。

秋風に
たなびく雲の
絶え間より
漏れ出づる月の
影のさやけさ
（『新古今集』
左京大夫顕輔）

（秋風に吹かれて長くたなびく雲の切れ間から、漏れ来る月の光の澄みきって清らかなことよ）

秋の夜空を見上げれば、明るい月が皎々と照り輝き、秋風に揺れる大地の草花を優しく包み込んでいます。今年の十五夜（中秋の名月）は十月一日、十三夜（後の月）は十月二十九日です。ひと月に二度巡ってくる名月を、心静かに眺めてみてはいかがでしょうか。たとえ雨雲に隠れてしまって見えなくても、「雨の名月」という言い回しがあるように、満月を心に思い描いてみたり、雨間に仄見える風情を愛でたりするのもまた一興かと思います。

水の面に
宿れる月の
影を見て
三世の仏の
心をぞ知る
（藤原行家『人家集』）

（水面に映る月の姿を見て、三世の仏の心を知ることよ）

銀色の月の光は、池や湖の上にも降り注いでいるでしょう。水面の月は、まるで鏡のように映っていたり、吹き渡る風に少し揺らめいていたり……さまざまな表情を見せてくれます。

この歌では、水面の月に「三世の仏の心」を観じています。「三世」とは「過去・現在・未来」の「三世」を意味し、「三際」「過現未」とも呼ばれます。これら三つの世に存在する一切の仏は「三世諸仏」（三世の仏）と称されます。

ところで、三世にはどれくらいの仏様がいらっしゃると思われますか。例えば、過去仏としての釈迦仏、現在仏としての阿弥陀仏、未来仏としての弥勒仏の三尊が挙げられることもあれば、「過現未の三千仏」という仏教語があるように、過去・現在・未来にそれぞれ千体の仏が出現すると言われたりもします。また、『仏名経』というお経を読み、三世諸仏の名を唱えて礼拝（敬って拝むこと）する「仏名会」という法会がありますが、その『仏名経』には一万を超える仏様の名が列挙されているのです。行き着くところ、三世には無数の仏様が遍満（あまねく存在）しているということになるのでしょう。

たくさんの仏様の名をお唱えする仏名会については、次のような記述があります。

仏名会という行事は、平安時代の承和（八三四～八四八）の初めの年に、静安という僧侶が深草の御門（仁明天皇）の勧めによって始めたものである。後に天皇が命令を下してからは、天下に広く行われるようになっていった。

『仏名経』には、もしこの過去・現在・未来にわたる三世の仏の名を聞き、あるいはよくお経を書き写し、あるいは仏のお姿を描き、あるいは仏前に香花や伎楽（音楽）を手向けて、深く心を尽くして礼拝すれば、その功徳（善い行いを積んだ報い）は計り知れないほど大きいものがあると説かれている。

秋の夜空に照り輝く満月　写真撮影：髙岡輝幸氏

折り折りの記 (134)

西行は奥州を訪ふ秋の暮

波多野　重雄

西行は武士が台頭する平安時代の人であり、芭蕉は武家制度が確立し、形骸化する時代の人である。西行と芭蕉に共通することは、「武士の孤独」である。西行は上皇守護の北面の武士（親衛隊）であり、平清盛とも同僚で鳥羽法皇や崇徳院の知己を得る。

西行が出家したのは二十三歳。芭蕉も二十三歳の時、藤堂家の若君良忠に仕えていた。

西行は三十九歳の時、奥州の藤原秀衡の元を訪れ、平泉から高野山に庵を造り戦乱を避けた。

芭蕉は西行に憑依して旅するしか道はないと自分の身を西行に仮託することで精神の武装をした。深川に身を決めた芭蕉は連句興業の座を捌いた。

（高尾山健康登山の会会長）

修三密

身密　創新新
口密　造超人
意密　生大悟
三密　導即身

厚木市　荒井　一雄

師は弟子に
三密教へ
秋深し

三密を修む

『身密（手に印を結ぶ）』は
斬新なる心を創り、
『口密（口に真言を唱ふ）』は
超人なる身体を造る…
『意密（心に大日如来様を瞑想す）』は
最大の悟りを生じ、
これら『身・口・意の三密』の実践こそ
『即身成仏』へと導く…

かれている。

私たちは生まれ変わっても、至る所で三宝（仏法僧）に巡り会うことができる。仏のいない世に堕ちても、心に仏を念じ、口に仏の御名を唱えて、三世の諸仏を拝まなければならない。

願うところは、三悪道（地獄・餓鬼・畜生）の苦しみをとどめ、国は豊かに人々は暮らしを楽しみ、邪見（間違った考え）の人に善根（善い行いの根本）の心を思い立たせて、皆で一緒に仏の国に生まれることなのだ。

（『三宝絵』下）

私たちは今、三世の真ん中の世（現世）を生きています。「値遇の縁」という言葉があるように、生まれてから今日まで目にしたものは、前世からの因縁（仏縁）による深い巡りあいだったのかもしれません。この話にあるように、仏の名をお唱えしたり、お花やお香をお供えし、音楽を捧げたりするのが一番でしょうが、それができなくても、いつも心に仏様を感じ、感謝の心を持って生きていくことが大切なのでしょう。

さしながら
三世の仏に
奉る
春咲く花も
秋の紅葉も
（選子内親王
『発心和歌集』）

（そっくりそのまま三世の仏にお供えしよう。春に咲く桜の花も、秋を艶やかに彩る紅葉も）

夜空に輝く月はもちろん、水面に映る月影や、山野に微笑む秋の草花にも、仏様の心が宿っています。それはきっと私たち人間の心の中にも、もともと備わっているのでしょう。まだ見ぬ来世に向けて、この現世の庭に「善根の種」を蒔いていくことができればと思います。

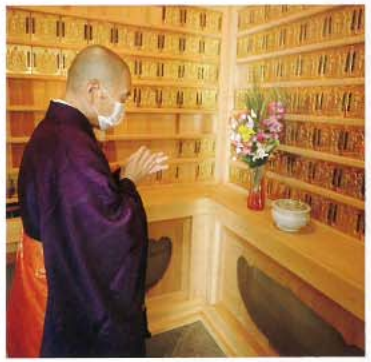
（栃木北部教区普済寺）

秋彼岸先師墓地参り

九月二十二日

重陽の節句（九月九日）縁起良き日にお釈迦様と御縁を結ぶ
仏舎利塔奉安懸仏総供養法要厳修

菅谷執事長により回向文が奉読される



懸仏を懇ろに供養する

法要前には法話が行われた

仏舎利塔内を参拝する奉納者

高尾山仏舎利塔 結縁牌懸仏のおすすめ

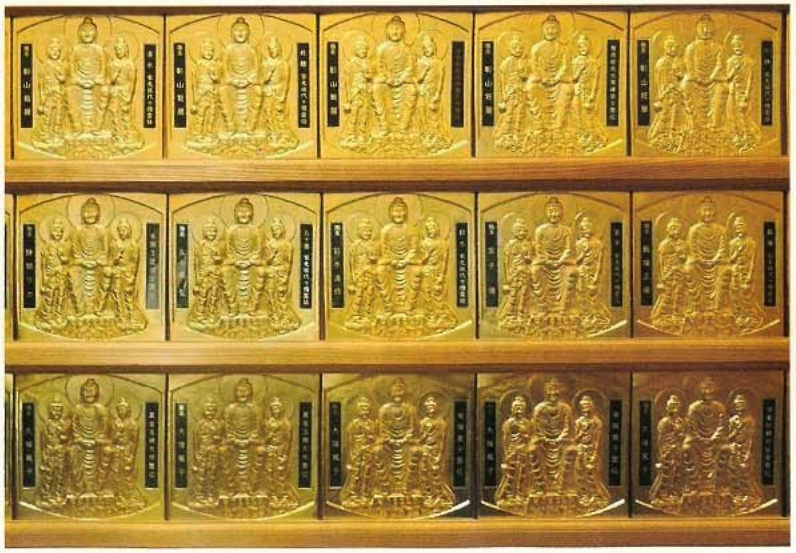
高尾山にはタイ王国・王室より授けられた、大聖釈尊の真身骨を奉安してある仏舎利塔があります。そしてその周りを囲むように建立された百観音お砂踏霊場がございます。

御信徒各位には、釈尊との御勝縁を結ばれますよう、仏舎利塔内に結縁牌懸仏（かけぼとけ）をご納仏されることをお勧め申し上げます。

この結縁牌懸仏は、夫々のご家族の先祖代々供養の為に、あるいは講中、参拝団の物故者慰霊の為に、お釈迦様と御信徒の皆様との尊いご結縁のしるしとして、霊名あるいは施主のご芳名を刻み、仏舎利塔内壁面に奉安し、大聖釈尊の聖骨と共に幾久しく供養されるものであります。

御納仏冥加料
一体　拾万円也

尚、お申し込みの方には「御納仏回向之証」をお授け致します。（左の写真）



結縁牌懸仏新規奉納者御芳名

小金井市　保立　允
川崎市　田中　俊子
町田市　米山　純河
調布市　原田　充彦
相模原市　大野眞佐子
足利市　大滝　弘義
浦安市　佐藤　学
鹿沼市　福田　貞二

（順不同・敬称略）

高尾山年代記

歴代山主の事跡をたどる　10

明治大学博物館　外山　徹

七世源智2―長尾景虎関東遠征

永禄三年（一五六〇）十二月二八日付の北条氏康による寺領寄進状は、管見のところ、世情一般の動向に高尾山が位置付く最も古い史料である。収益を薬師堂の修復料に充てる土地を武蔵国の内に寄進するので、本意祈念のため絶えず勤行をするようにという短い一文であるが、高尾山が日本史上に姿を現した瞬間であった。

長尾景虎の南進

北条氏によって本拠上野国（群馬県）を追われた上杉憲政は、天文二一年（一五五二）五月、三国峠を越えて越後国（新潟県）に落ち延びた。その地の支配者はかの長尾景虎、後の上杉謙信である。山内上杉氏と越後長尾氏はいわく因縁のある間柄であった。長尾氏は山内家の縁戚である越後上杉氏の家宰を務める家系だったが、景虎の父為景の時、主君房能を討った。一説には謀叛を疑われての、やむを得ぬ決起と言われる。制圧におもむいた山内家の当主顕定も敗死させており、憲政は言わば仇敵のところに転がり込んだわけである。

景虎は両家の古くからの縁を思い、恩讐を越えて憲政を受け入れ、すぐさま上野国（群馬県）に出兵した。しかし、越中（富山県）・信濃（長野県）方面の情勢が緊迫し、長くは滞陣できなかった。その後、川中島（長野県）での数次にわたる武田信玄との戦いを経るなど、しばし年月は過ぎたが、永禄三年の八月、ようやく関東管領上杉憲政による北条氏追討を名目とする、本格的な関東遠征の機会が到来した。

戦国大名は、北条氏もそうだが、帰順しない相手は攻め滅ぼすものの、恭順の意を表する者は配下に組み込む形で版図を拡げていった。つまり、その領国は、在地勢力の支配地の集合体でもあった。北条氏の押し上げに、北関東の諸将も多くが帰順したが、その意味で、彼らは大勢の転換によってどちらの側にも付く不安定な存在であった。景虎が北条方の沼田城・岩下城を攻略して上野を南下すると、そのことはたちまち顕在化した。房総の里見氏に攻勢をかけていた北条氏康は、景虎侵攻の報に接すると、ただちに兵を返して松山城（埼玉県東松山市）に入った。しかし、敵方の勢いを見てその地での対決を得策とせず、兵を引いた。景虎は厩橋城（前橋市）に帯陣し年を越す。氏康が高尾山へ寺領を寄進したのは、来るべき景虎との対決を目前としたその時期である。

氏康は名目上、前年の暮れに隠居し、家督を氏政に譲っていた。これは、飢饉への対応に充分な策を取れず、支配の安定を自らの進退によって維持しようとしたものと評価されているが、それから一年の後、最大の試練に直面しようとしていた。

軍勢の乱暴狼藉を禁ずる長尾景虎の印判状

景虎発給の制札

年が明けて二月、景虎が南進を始めると、進路の武蔵は言うに及ばず常陸（茨木県）、下野（栃木県）、房総の諸将が陸続と合流し、その勢は九万六千とも言われる大軍となった。

薬王院文書の中には永

禄四年二月付で軍勢の乱暴狼藉を禁ずる四枚の制札が残る。

制　札

右、武州小仏谷において、関越諸軍勢濫妨狼藉堅くこれを停止、もし違反の輩有るは甲乙人を嫌わず罪科に処すべき状、件のごとし

永禄四年

二月　日(地帝妙印)

右ページ写真の制札は江戸後期の地誌『新編武蔵風土記稿』（文政五年・一八二二「多磨郡之部」成立）にも収録されているが、当時は「地帝妙」の印判が誰のものか分からなかったらしく発給者が書かれていない。この印判の主こそ長尾景虎その人であった。同様の文面の制札は他に三枚残り、同じく景虎の発給で椚田谷の地名が付されたもの、太田資正の発給による小仏谷（左ページ写真）・案内谷とした二枚は二月晦日と日付がある。岩付城主太田資正はかの太田道灌のひ孫にあたる人物で、その間、一族は岩付城・江戸城をめぐる攻防戦において、時に上杉方、時に北条方と立ち回っていたが、この時、資正は松山城（埼玉県東松山城）を攻略するなど越関連合軍の先鋒を務めていた。

越関軍の進路は大軍ゆえに複数の経路が推測されるが、武蔵府中・分倍河原を通る経路はこれまでにも数々の合戦を生起させてきた。後の小田原の役の際の豊臣秀吉の制札がかなり広範囲に発給されたことからすると、総大将名義の制札は必ずしも実際の進路を反映しているとは限らないが、資正のような配下の武将による発給は、より実際の行動圏に近い可能性がある。相模国当麻宿（相模原市）に敵勢が着陣したという北条氏照による三月三日付の書状が遺るので、現在のJR横浜線東側の御殿峠を通る道、西側の七国峠を通る道あたりを軍勢が南下した可能性がある。その北条氏照は、大石氏の名跡を継ぎ、由井城（下恩方の浄福寺城カ）に在ったと推測されている。

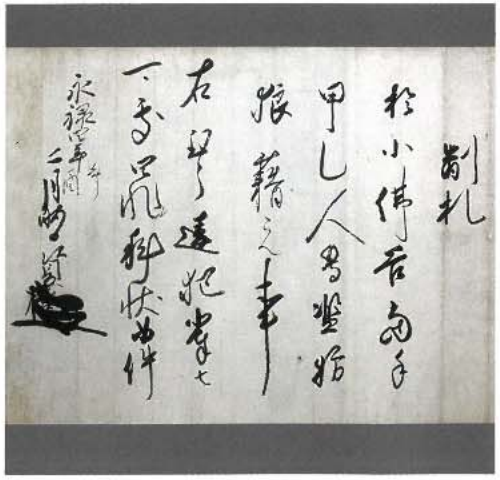
北条方の作戦は野戦での迎撃はせず、河越（埼玉県川越市）、玉縄（神奈川県鎌倉市）をはじめ支城は籠城戦の構えとし、北条領奥深くまで引き込んだ上で、盟約関係にある武田・今川の援軍に腹背から圧力を加えさせるというものだった。玉縄城籠城の武将に宛てた三月三日付の氏康書状には望みの所領を与えるので「粉骨尽くし忠信抽ずるべし」との文言があり、三日付の氏政書状ではもし討死の場合は子を取り立てる旨が述べられるなど緊迫感が伝わってくる。越関軍は三月下旬に至って小田原城を攻囲した。しかし、広大な縄張りをもつ難攻不落の要塞は、大軍をもってしても短期に攻め落とせるものではなかった。

情勢は氏康の思惑通り、武田・今川勢の蠢動に対し、越関軍は包囲を解いて退却に移った。閏三月、景虎は鎌倉鶴岡八幡宮にて関東管領に就任する儀式を執り行った。山内上杉家の名跡を継ぎ、憲政の片諱を受けて上杉政虎と名を改める。景虎にとって今次の遠征はこれによってひとまずの目的を達したとも言えそうだ。その後、将軍足利義輝の片諱を受けて輝虎とし、出家をして謙信を名乗る。

かくして薬王院文書に、戦国大名ゆかりの文書が遺ることになった。

《参考文献》萩原龍夫・杉山博編『新編武州古文書』上下（角川書店、一九七五・七八）、黒田基樹『戦国期東国の大名と国衆』（岩田書院、二〇〇一）、福原圭一・前嶋敏編『上杉謙信』（高志書院、二〇一七）

おことわり　本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。



太田資正発給のものには花押と二月晦日の日付

一番幸せな入生

八王子市　澤田　守正

高尾山のケーブルカーに乗り、歩いて二十分ほどで薬王院に着く。

境内の入り口に四天王門があり、額に高尾山と書かれてある。門手前右に中興の祖・俊源大徳像が鎮座されている。

総檜の重厚な門を通り抜けると、右側に勇壮な大天狗・小天狗像が造立されてあった。

少し進むと、右側に碑が三基あり、近代俳句の巨匠である高浜虚子の次女・星野立子、孫の星野椿、曾孫の星野高士三人の句碑が立っていた。

実は八王子に長年住んでいたが、高尾山に高浜虚子の親族の句碑があるのを知らずにいた。

今回、高尾山との深い関係があるという、私の大好きな虚子のことを書きたいと思う。

虚子が七十一歳の句

深秋と
いふことのあり
人も亦

季節は春夏秋冬という移り変わりがあり、それぞれに季節感は異なるが、秋深くなった季節は紅葉を経て、やがては落ち葉となり、この季節の終焉を迎える時候である。

季節に移ろいがあるように、人も亦色々な人生経路を経て、たどり着いた人生の深秋期を感じたならば、自らの生きてきた来し方を、心静かに想いを巡らせるのも良いのではと思う。

その想いは、「よくここまで頑張ったな」と思う人もあれば、「俺の人生何だったのか」と思う人もいるだろうが、「人生、楽しかったな」と思える人が、一番幸せな人生を送った人なのかもしれない。

ニュースキャスターの筑紫哲也も、著書「スローライフ」の中で、ああ面白かった。と臨終の際にどこまで言えるかが、限りある生の勝ち負けを決めるものさしだと私自身は思っている」と書いている。

自分の人生の生き方に、繰り言や愚痴を言ったとしても、そこに他の人を納得させるものは何も無いであろうし、人から何を今更、と内心で思われるだけであろう。

もし、自分自身の生き様に「何故か」というわだかまりや、疑問が生じたなら「自分には、自分のここまでの生き方に、何かが足りなかったから」と自らに言い聞かせるしかないのである。

それは深秋期を迎えた人の感想であると私は思う。

兎にも角にも、この句は人生の哀愁を、そこはかとなく感じさせるものがある。

虚子の句に、秋に相応しい好きな句がある。

虚子七十五歳の句

彼一語
我一語
秋深みかも

この句には、色々な情景想像させられるが、深秋期を迎えた男同士が、秋の虫の音を聞きながら杯を傾け、お互いに今更に語ることなどもなく、一人が「嬉しい酒だな」と言えば、「ああ、そうだな、良い夜だ」ともう一人が答える、と言った風景が浮かんで来るのである。

そこには、信頼しあった、そして、かけがえの無い友を連想させる。

このような友が、一人でもいる人は、なんと幸せな人であろうかと思わせる句である。

私にもこの様な風景の中で酒を酌み交わす友がいたが、その友はもういなくなった。

遠く天に昇って行った。

この友を想うとき、この句はしみじみと私の心に染み入るのである。

合掌

大小天狗像の脇に立つ星野家三代句碑

聖天堂開扉供養厳修

九月十二日、十三日の二日間、普段は扉が閉まっている聖天堂において、御信徒様へ堂内を公開する、開扉供養が執り行われました。

このお堂の御本尊様は障難を除き、夫婦和合などの円満なる成就に御利益をもたらす大聖歓喜天（和合歓喜天）様であり、薬王院の御本尊・飯縄大権現様の五相合体の御姿の一つです。

この法要は毎年九月の第二土日に行われます。

普段は開かれていない聖天堂が開かれる

総本山智積院宗務総長来山

御挨拶に訪れた芙蓉宗務総長（左）

去る九月八日、真言宗智山派総本山智積院より、芙蓉良英宗務総長が宗務総長再任と、新内局発足の御挨拶の為、暑さも和らいだ初秋の高尾山へ来山されました。

芙蓉宗務総長は山麓の不動院清滝庵において、大山御貫首及び菅谷執事長と御挨拶を交わされ、宗務についてしばしの間親しく御歓談されました。

三社寺合同 疫病早期終息祈願祭厳修

去る九月十七日、三社寺合同疫病早期終息祈願祭が執り行われました。

この祈願祭は、東日本大震災慰霊祭を北口本宮富士浅間神社と大山阿夫利神社との三社寺合同で行ったことを契機として、日本各地の被災地復興を祈るため、一年毎に三社寺の輪番で行われております「全国災害復興祈願祭」を、本年は形式を変えて行った法要です。

本年は、新型コロナウイルスの感染予防対策観点から広域移動を自粛し、富士浅間社で行われた祈願祭の同日に、菅谷執事長御導師のもと、薬王院大本堂にて一日も早い疫病終息と、医療従事者の方々や皆様の御健康を御祈念申し上げました。

疫病早期終息を願いお札をお加持する

観音菩薩の宗教 ㉞

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

二十一ターラー菩薩を讃える経典（その9）

今回も前回に続き『二十一ターラーへの讃』の訳出と解説を行う。

(19.1)（汝に）帰依する。
(19.2)神々の集会の監督者（と）キンナラに供養され
(19.3)喜びと満足を生み出す（汝は）
(19.4)諍いや悪夢を破壊する

（解説）(19.1)「集会」は、軍隊・部隊を意味するサンスクリット語ガナ（gana）の訳。チベット語訳では、集まりを意味するツォク（tshogs）。ここでは安藏の漢訳語を引いた。「監督者」は、サンスクリット語アディヤクシャ（adhyakṣa）の訳。チベット語では「王」（rgyal po）と訳される。(19.2)キンナラ（kiṃnara）の語源は「何の人、どんな人」で漢訳では「人非人」ともされ、「緊那羅」などと音写される。起源はインド神話に登場する半神半獣の存在であるが、仏教に受容され八部衆の一尊となった。日本では興福寺藏の緊那羅像（国宝）が著名。チベット語訳では神とキンナラのあいだに「と（dang）」が入る。(19.3)「喜び」と訳したムディター（muditā）は慈悲喜捨の四無量心の一。「満足」はアボーガ（Abhoga）の訳語。ウイルソン（前掲書、一五七頁）は fullness（満ち足りたこと）と英訳している。この句の和訳はサンスクリット語を英訳したウイルソンの Joy-producing One に従ったが、チベット語訳は「喜びの甲冑」としており大きく異なる。漢訳も「堅鎧」とあり、チベット語訳に近い。ウイルソンの推測によれば、チベット語訳者の用いたテクストに「ヴァルマ」（甲冑）の語があるのだろうとされる（前掲書、一五七頁）。

安藏の漢訳は以下の通りである。「敬禮諸天集會母／天緊那羅所依愛／威德歡悅若堅鎧／滅除鬥諍及惡夢」

Sの注釈では「苦を焼くターラー（Tārā Duḥkha-dahanī / sgRol ma sdug bsngal sel byed ma または sgRol ma sdug bsngal bsregs ma）」と名付けられる。その図像は菩薩相の一面二臂座像で右脚を下に降ろし、ジャスミンの花のごとく白い膚を有す。胸の前に両手で苦を焼くための火鉢を持つ。

ニンマ派では「白い傘（Sitātapatrā / gDugs dkar mo）」と呼ばれる（Khenchen Palden Sherab 他、前掲書、一六三頁）。これは白傘蓋仏頂（Sitātapatroṣṇīṣa）とは別の尊格である。また、Nの注釈では「征服されぬ女帝ターラー（Tārā Ajitarājñī / sgRol ma mi pham rgyal mo）」と名付けられている。

(20.1)（汝に）帰依する。
(20.2)（汝は）月と太陽に満たされし輝ける眼により
(20.3)ハラを二度唱えることと（一度の）トゥッターレーにより
(20.4)慢性的な熱を破壊する

（解説）(20.1)「月と太陽」はサンスクリット語チャンドゥラールカ（candrārka）の訳。(20.2)「眼」はサンスクリット語ナヤナ（nayana）の訳。チベット語訳ではチェン（spyan）。ナヤナは観音菩薩の原語アヴァローキテーシュヴァラもしくはアヴァローキタスヴァラには用いられていないが、観音菩薩のチベット語訳のチェンレーシ（sPyan ras gzigs）には含まれる。これによりチベット人にとってこの菩薩は観音菩薩との連想があるかも知れない。(20.3)ハラは語根フリ（hṛ）の変化形で、「得ること」と「取り去ること」の両義がある。先のニンマ派の解釈によれば（Khenchen 前掲書、一六八頁）、「輪廻から（解）脱する」とともに「空の至福との合一の実現を獲得する」こととされる。拙訳では、チベット語訳や英訳を参照に「二度唱える（dvir-ukta）」はハラに掛かるとした。したがって次のトゥッターレーは一度と捉え得る。以下のごとく漢訳ではこれが曖昧である。トゥッタレーについてはすでに見た（拙稿「観音菩薩の宗教」⑪㉞など）。(20.4)この詩句では、これらマントラを唱えることにより輪廻において何度も燃え盛る慢性的な熱が破壊されると説く（Willson 前掲書、一五八頁参照）。

安藏の漢訳は以下の通りである。「敬禮日月廣圓母／目睹猶勝普光照／誦二喝囉咄怛哩／善除惡毒瘟熱病」

Sの注釈によれば「成就を生み出すもの（Tārā Siddhi-saṃbhavā / sgRol ma nngos grub 'byung gnas ma）」と呼ばれる。その尊容は、一面二臂の座像、身体はオレンジもしくは銅色に輝き、胸の前に両手で金色の瓶を持つ。

Nの注釈によれば「山に住するターラー（Tārā Śabarī / sgRol ma ri khrod ma）」などと呼ばれ、伝染病や高熱から衆生を守る菩薩とされ、身体には木の葉の装束をまとっている。その右目は太陽のごとく疫病を退散させ、左目は月のごとく健康を取り戻すとされる。ことに二度のハラと一度のトゥッタレーを唱えることにより、病気を治すと説かれている。

(21.1)（汝に）帰依する。
(21.2)（汝には）三つの真実を示し
(21.3)解放する力が具われる（汝は）鬼魅・屍鬼・夜叉を
(21.4)制圧する。最高の者。トゥレー

（解説）(21.1)～(21.2)「真実」はサンスクリット語でタットゥヴァ（tattva）、チベット語訳でデニ（de nyid）の和訳。原意は「そのようにあること」で、「真実」「真性」などと漢訳される。「ありのままの現実」を意味することから、英語では reality などと訳される。S系、N系、いずれにおいても、この三つは「身・口・意」と捉えられている。ターラー菩薩は身体的行為、言語、心のすべてを兼備し、衆生を救済するとの思想である。(21.3)「鬼魅・屍鬼・夜叉」はそれぞれサンスクリット語でグラハ（graha）、ヴェーターラ（vetāla）、ヤクシャ（yakṣa）である。グラハは元来、惑星を意味し、人の心身に災いをもたらす鬼をも表した。漢語では「悪星」とされることもある。ヴェーターラは生き返った死体でゾンビに相当する。インドの説話『屍鬼二十五話』はチベットやモンゴルで翻案され独自の発展を遂げた（拙稿「モンゴル文『魔法の死体（Siditui Keğür ün Üliger）』」研究序説」『日本とモンゴル』一二三号、日本モンゴル協会、二〇一一年）。ヤクシャはインド神話から仏教に受容された悪鬼だが、後に八部衆に組み込まれ護法神となった。

（以下、来月号に続く）

チベットのキンナラ像。銅製・金箔。十九世紀。個人像。（https://beautifulobjectsfromtibet.wordpress.com/2015/02/07/kinnara/）

院内散歩 ㊹

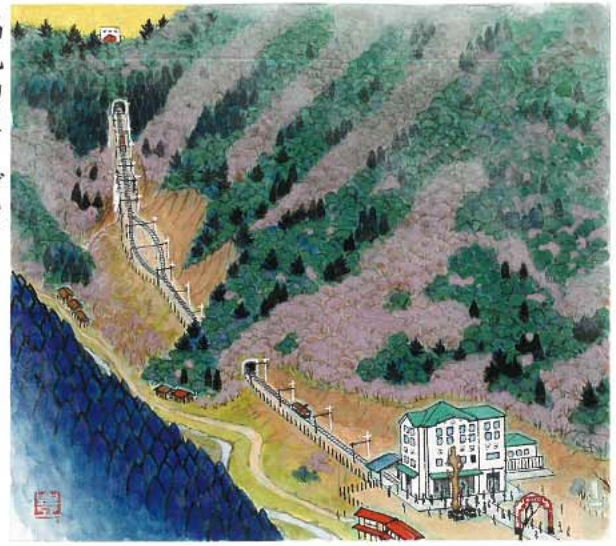
～薬王院の展示物～

版画『ほろほろ酔ふて』　作・秋山巌

高尾山物語 30

ケーブルカー開通

絵・橋本豊治



高尾山のケーブルカー
山麓の清滝駅（海抜二〇一メートル）から、中腹の高尾山駅（海抜四七二メートル）の高低差二七一メートルを、約六分で登り、三十一度十八分の急勾配はケーブルカーの線路では日本一です。

高尾山におけるケーブルカーの歴史は、薬王院第二十七世貫首・武藤範秀大僧正が大正期にヨーロッパ視察した際に、山地を走るケーブルカーを見たことに感銘を受けたことに始まります。

当時、高尾山を参拝するためには、浅川駅（現在のJR高尾駅）から高尾山麓まで歩き、更に山道を登る必要があったので、参拝の利便を図る為にと発願されました。

関東大震災により周辺の地形が変わり、経路変更する等の困難がありながらも、昭和二年に営業を開始し、戦時中は休止していた時期もありましたが、昭和二十四年より営業を再開しました。

現在では高尾登山電鉄株式会社として、高尾山を訪れる多くの人達の足となっております。

競争相手
出てくるものよ
真の実力
つけて抜け

高尾山の昆虫

ムツモンミツギリゾウムシ

132

ゾウムシの近縁の仲間にミツギリゾウムシ科の甲虫がいて、やや細長い瓢箪型で愛嬌のある容姿をしています。

やや山地性であり、比較的新しいブナの伐採木や立ち枯れに集まり、灯火にも時折飛来することが知られています。

私が初めて出会ったのも灯火に来た個体で、見た瞬間とてもユニークな虫だと直感したことを思い出します。

日本産のミツギリゾウムシは七十種程記録されているようですが、今回ご紹介するムツモンミツギリゾウムシは、ただのミツギリゾウムシに大変よく似ているものの、より小型で上翅の黄色い斑紋が少ないことで見分けられます。

本種は全国的にみてそう珍しい種ではないように聞きますが、私は高尾の灯火で数回見かけただけですので出会うと思わず嬉しくなります。

長い間、「ミツギリ」の意味が分からず、どういう意味合で付けられたのが謎のままでしたが、口吻の形が穴空け用の工具「三錐」に因んでのことらしく、メスが長い口吻を使って朽木に穴を空けて産卵する本種に相応しく思い、至極納得がいきました。

（撮影・文 松島　孝）

おはなし散歩道

カエデの秘密

湯沢町　富樫あい子

武州の里山に、男二人の兄弟がいた。

兄が弟に言った。

「裏山のカエデの木を切るから手伝ってくれ」

「何で切る。俺はいやだ」

大きい家が、すっぽり入る位の枝葉が張っている大木である。

「お前は一生に一度、銭に成るかどうかの杉を育てているが、実の成る木に切換えて売り歩け」

兄は確かに山を整地して、実の成る木を育て、生計をたて、子沢山の家族を養っている。

梅、柿、梨、栗、銀杏、クルミとふやしている。

「お前は子どもがいないから、のん気なんだ！」

兄は怒り口調で言う。

「死んだ親父が、カエデは、我が家の守り神なんだ。大事にしてくれよ。と言ったじゃないか！」

真剣に言い返した。

「今、生きている者が大事だ。あんなに大きくなり、場所をふさがれては他の木が育たない！」

カエデは、兄の山と弟の山との境にある。弟は父親から聞いた話を兄に思い出して欲しい。

『昔、雪の中、狩りに出かけた帰りに親父が家の杉林を通った時、杉の枝に溜まった雪がいきなり頭に落ちてきて気を失った。無意識に近くのカエデの洞に身をよせたらしい。気づいた時は洞の中だった。カエデの木の洞が無かったら凍え死んでいたという。命の恩人の木なのだ』

と親父が語っていた。

翌日弟は、カエデの木と自分の山を交換しようと兄に話しかけたが、

「木こりを、頼んである。もう切っている頃だ」

弟は、山へ走った。

すでに四、五人の木こりが切りかかっていた。

「やめてくれ～」

叫んでも木こりは、せっせと切っている。

弟は涙が止まらない。切られるカエデを見てトボトボ家に帰った。

太い幹は、一日で切り倒すことが出来ないと、木こりも帰って行った。

次の日の朝、木こりが騒いでいる。昨日切ったはずの切り口がない！

不思議な事があるものだ。木こりは、また切り始めた。やはり一日では切り倒すことが出来ない

「また明日だ！」と言って帰って行った。

翌日、木こりが来た。また切り口がふさがっている。木こりは気分が悪くなり仕事を断った。

兄は腹を立て怒った。

「枯れて倒れろ！」

カエデをマサカリでメタメタに傷つけた。

その話を聞いた弟は、夜こっそりカエデを見舞った。すると、誰かがカエデに話している。

「ひどい目にあったな」

声の主は隣の杉の木だった。そこへフクロウやヨタカも飛んできて傷口から流れ出る樹液をなめてくれた。フクロウが、

「カエデ爺さん、傷口が痛くないかい。でも樹液がとろりと甘いよ！」

カエデに言った。

「実は、秘密だがワシは砂糖カエデという大木じゃ。切られてたまるか。傷口は自分で治す。ワシの樹液は甘いのだよ。その液で傷口をふさぐのさ。賢い人間はワシの樹液を集めて甘味として使っている。甘いだろう」

「うん、美味しい！」

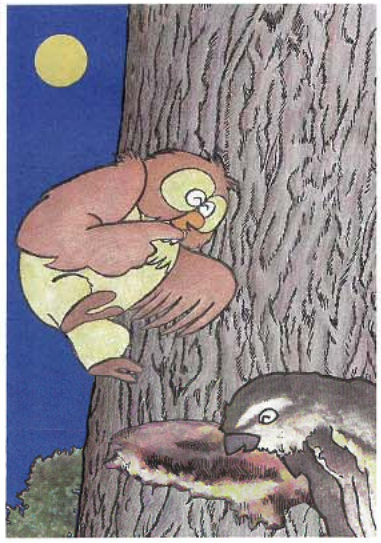
ヨタカもフクロウも喜び羽ばたいていた。

「ワシは傷口を治す。もう二度と語る事はない」

とカエデは傷口を閉じた。ゴオ～と風が吹き、鳥達はいなくなった。

カエデの話を聞いた弟は、兄に一部始終話すと「そうか俺が悪かった」と詫びた。二人は仲良くカエデをいたわり甘味作りに励み、商売は繁盛していると聞いた。

※元祖メープルシロップかも知れません。



（挿し絵・小出　茂）

いけばなの心⑧

華道教授　佐藤　宗明

十月に入り、やっと過ごしやすい気候になってきました。ここのところ夏の暑さが非常に厳しく、今年は特にマスクを着用する事が多いので、やっと体に優しい時期になりました。

秋といえば『スポーツの秋』、『食欲の秋』、『芸術の秋』、など色々な秋がありますが、植物に関係したものだと『実りの秋』が思いつきます。

今回の作品はパープルファウンテングラスという穂と葉が特徴的な花材にツルウメモドキという赤からオレンジ、黄色の実を実らせる蔓系統の花材をあわせた生花新風体です。

従来の花材感からすると、蔓の植物は置いて生ける作品に使うことはありませんでした。生花では水面は大地の象徴となっており、大地から蔓が出てきても自立することが無い為です。

しかし、新風体では目の前にある花材の姿を見つめて、自然の姿を想像する事になります。そのために蔓の植物であったとしても、生花の品格を表現できるなら使用する事が可能となります。

この作品ではツルウメモドキの姿と、パープルファウンテングラスの姿を同調させることで秋の実りの雰囲気を表現して、あしらいの寒菊で花が少ない季節に小さい花を見つけた時の喜びを表現してみました。

次回は池坊に伝わる伝統的な秋の作品を紹介したいと思います。

花材：パープルファウンテングラス
ツルウメモドキ・寒菊

◎健康登山の皆様へ
高尾山報投稿の御案内

御護摩受付所では、皆さまの『健康』に関する思いや思い出・習慣、又は『健康登山』を通じて経験した出来事などの心温まるお話を聞かせて頂いています。

そこで、皆様のお話を多くの方々にお届けできますように、御護摩受付所に「投稿箱」を設置致しまして、皆様から投稿頂いたお話や作品を、『高尾山報』に掲載させて頂いております。

その他、おもしろい体験・変わった出来事・ポエム・俳句等どんなお話でも結構です。是非お聞かせください。御協力宜しくお願い致します。

※　投稿頂きました作品は全て掲載できるよう努めますが、当山の判断で掲載しない場合もあります。また、多くの方に投稿頂きました場合、掲載までお時間を頂く場合がございますことを御了承下さい。

『高尾山健康登山の証』のお勧め

年間約二百八十万人の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。

登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、いまでは約五万人の方々が会員となられております。

期限はございませんので、御自分のペースでお楽しみください。

また、一冊に付き二十一回スタンプを押すページがあり、終了したことを満行と言います。満行されますとお祝い膳として、精進料理の御接待や、健康登山者限定の記念品などと交換もできます。

帳面……七百円
スタンプ…百円

高尾山　季節散歩

暦の言葉
「七十二候」
霜始降
「しもはじめてふる」
十月二十三日～十月二十七日

朝晩に、冷え込むようになり、空気中の水蒸気が固まり霜となり、地面に降りるようになる時期の事です。

霜は農作物に悪影響を与え「霜害」を引き起こすことでも知られております。

今月の風物詩
滑子

独特のヌメリを持つナメコは、自然界では秋になるとブナやナラの枯れ木に発生します。

現在では原木栽培や菌床栽培など、人工栽培で多く生産されております。

みそ汁の具などに使用され、薬王院の精進料理でもよく使用される食材です。

■健康登山者投稿作品■

季節の絵手紙「早く終息を」

八王子市　栃谷玲子　様

一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

九十三段　**良い伝統を後世に遺す**

伝統とは「良いもの」として継承されてきた価値観です。現代に生きる我々は先人から伝わる伝統の本質を見極め、守るべき部分は守り、変えるべき部分は変え、後世の子孫たちへ繋いでゆく努力が必要とされるでしょう。

郵送御護摩申し込み受付について

当山では、御護摩修行に参加できない方の為に、御護摩札の郵送をお受けしております。

手紙、FAX等でお申し込みをお願いしておりますが、新型コロナウイルスによる感染症流行の影響により、多くの御信徒の方々から郵送御護摩のお問い合わせを頂いている現状を鑑み、高尾山報本号に同封致しました**郵便振替「払込取扱票」**を利用して、お申込みいただけますよう便宜を取り計らいましたので、宜しくお願いいたします。

尚、元旦御護摩等、お正月以降の御護摩申込をご希望の方は、申込方法が異なりますので、お手数ですがご連絡願います。

七五三身上安全祈願

「七五三」とは、皆様方の可愛いお子様が、これから健康にすくすく育ちます様に、又、交通事故などに遭わないように、との願いを込めて寺社にお参りするという行事です。

高尾山でも御本尊・飯縄大権現様の御加護を願い、毎年多くのお子様がお参りに訪れております。十月～十一月の間、山上「御護摩受付所」にて、「七五三祝い子育て祈祷」を受け付けております。

どうぞ皆様で御来山なされますよう、ご案内申し上げます。

※十一月中の土・日・祝日には大変な混雑が予想されますので、時間に余裕を持って早めの御来山をお勧めしております。

登山だより

■十一月行事日程■

一日～七日
聖天秘供（聖天堂）

十日、二十二日
弁天様御縁日

八日
仏舎利詣り（仏舎利塔）

九日、三十日
御詠歌勉強会
（十時山麓不動院）

二十八日
奥之院開扉供養
（十時山麓不動院）
月例写経会
（十三時山麓不動院）

二十九日
高尾山とんとんむかし
「語り部の会」
（十二時半山麓不動院）

二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
（九時大本堂）

☆神徳報謝百味飲食供
高尾山御本尊飯縄大権現様の日々の御加護に感謝し、沢山の御供物を捧げて御本尊様威光倍増の為、御供養申し上げる法要です。
皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は大本堂までお申し出下さい。
尚、法要終了後に百味のお札を授与致します。
御志納金　一口三千円以上

毎日のお護摩奉修時間
（4月15日～10月31日まで）

午前5時30分
〃　9時30分
〃　11時00分

午後0時30分
〃　2時00分
〃　3時30分

ご講中・団体等御相談下さい。

秋の特別精進料理「もみじ膳」のお知らせ

本年も毎年ご好評をいただいております、秋の味覚を楽しむ特別精進料理「もみじ膳」を実施致します。大広間でのお食事となり、ご予約無しでご案内しております。食材に限りがありますので早めの来山をお願い致します。

期　間　十月十二日(月)～十二月十一日(金)
営業日　平日のみ（団体予約多数の場合は実施しないこともありますのでご了解下さい）

※ご来山の際には、事前にホームページをご覧になるか、お電話などで御照会下さい。

価格　二千九百円

特別精進料理
「もみじ膳」　2,900円
（11:00より受付開始）

※写真は昨年の料理のものです。

高尾山報助成金志納者
御芳名（順不同・敬称略）

三鷹市　牧戸　毅
鹿沼市　松本　俊夫
坂戸市　大室　忠行
八王子市　岩澤　正登詞
上尾市　國嶋　福生
青梅市　加藤　セツ子
新座市　彰山　粧麗
〃　髙橋　久子
邑楽郡　今井　一惠
八王子市　やまびこ茶屋
〃　佐藤　光
〃　峯尾　正彦
富里市　森　照森
国立市　峯岸　成禎
羽生市　森田　猛
入間郡　清水　晃
川口市　増田　幸次郎
〃　増田　道子
小金井市　小野　誠
八王子市　田中　秀和
高尾山健康登山者一同

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号　193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人　菅谷秀文
編集人　渋谷秀芳
印刷　ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円

高尾山薬王院ホームページ
http://www.takaosan.or.jp